

キリスト教教育における音楽の意義に関する一考察

深 谷 潤

A Study on the Significance of Music in Christian Education

Jun Fukaya

はじめに

少子化、大学全入時代等、キリスト教学校を取り巻く今日の社会的環境には厳しいものがある。しかし、2004 年の統計では、919 校、約 57 万人の子ども・若者たちが、キリスト教学校（幼稚園を除く）でキリスト教教育を受けている。その割合は、全国の学校数の約 1.9%、学生・生徒・児童数の約 3 %を占めている。¹ 数の上では、全国で多くのキリスト教教育の機会が存在していることがわかる。従来、キリスト教教育は、特にプロテスタントでは聖書を中心とした教育が盛んに行なわれてきた。学校礼拝や宗教科（聖書科）の授業はもちろんのこと、学校行事など様々な教育活動 において、聖書の言葉は教育目的を示す内容であり、シンボルとして不可欠なものと考えられてきた。先行研究においても、礼拝や授業の在り方に関するものが多数を占めている。

本稿の目的は、キリスト教教育において聖書と並び、またそれ以上に歴史のある音楽について論考し、キリスト教教育における音楽の意義を明らかにすることである。教育において、心、魂を育てる働きとして音楽は古くから重視されていた。音楽と人間の根源的な関係や音楽のもつキリスト教教育の可能性についてこれから論じていきたい。

1. キリスト教教育とは

キリスト教において、礼拝の中の讃美や祈りには音楽が欠かせない。幼児にとって、讃美することは、大きな声を出して皆と共に歌う喜びそのものであり、とても重要な役割を音楽は担っている。日本では、教会音楽を明治期以降盛んに導入してきた。パイプオルガンや聖歌隊の合唱等、設備や体制の整った教会も今では珍しくない。しかし、教会の教育に目を向けて見ると、子どもを対象とした音楽教育が著しく進んでいるとは言えない。その主な理由は、教会教育を中心としたキリスト教教育全体が、実践的・技術的分野とみなされてきたためと考えられる。

従来から、日本ではキリスト教教育の意味を「教会のもつ教育的機能」、「キリスト教的人間形成（小林公一ほか）」と捉えてきた経緯がある。² それは、子ども向けの限定的かつ実践的分野であり、学問的には教義学や聖書学の次に来る二次的な技術論と見なされていた。³ 実際に、子どものための日曜学校はなくすべき⁴（赤岩栄）と言う主張もあった。その根拠は、子どもにはイエスの受難や十字架、復活の意味が分からないためであると言う。聖書物語や教義的な内容が即、キリスト教教育であると捉える立場からは、確かに説得力がある。しかし、子どもは偏見にとらわれない、純粋な直観力をもつ人間であると捉えるならば、ある意味で優れた信仰をもっていると言えるのである。イエスが聖書で語るように、「子どものように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」（マルコによる福音書 10 章 15 節）のである。モンテッソーリが指摘するように、子どもは環境をいいものでも悪いものでもそのまま吸収する力⁵がある。人間は、言語を獲得する前に、音やリズムを通して様々な刺激を受け取り、中枢神経を発達させている。音楽は、自然や宇宙、人間などすべての存在の秩序そのものであると中世の音楽家は考えた。もしそうであるならば、幼い子どもは無意識のうちに、目に見えない音楽の中でたわむれているのかもしれない。このような、仮説を持ちつつ、これから音楽とキリスト教教育について説明していきたい。

本稿では、音楽がキリスト教教育と本質的に極めて深いかかわりがあることを、まずヨーロッパの大学教育を手がかりに考察する。特に、キリスト教と音

楽の関係について3つの側面から分析する。第1に、中世ヨーロッパの大学とキリスト教、第2に、カリキュラムの中の音楽、第3に、音楽と生活についてである。

2. 音楽とキリスト教教育

2.1 中世ヨーロッパの大学とキリスト教

世界最古の大学は、11世紀のイタリアのボローニャ大学⁶と言われている。それより800年近く遅れて日本で始めて創設された大学は、1877年の東京大学⁷である。その起源は、江戸幕府の開成所（蕃書調所）と医学所であった。西洋の学問、文化、制度を吸収することで近代化を果たした日本は、「和魂洋才」が示すごとく、日本の伝統的な道德観念を精神的土壌として残し、枝葉である専門知識や技術のみを取り入れようとした。⁸ その結果、西洋の大学の理念や目的には関心を示さず、その結果、西洋の学問の根底に流れる地下水を汲み損じてしまったと言えよう。その地下水は、主にヨーロッパの修道院で中世から流れてきたものであった。

先のボローニャ大学は、ローマ法（ピポ Pipo）や教会法（グラティアヌス Gratianus）の専門家が教鞭をとっていた法律中心の教育機関であった。ボローニャには、すでに聖ヴィターレ教会や修道院が存在し、アエミリア街道によって交易と商業の中心地として栄えていた。大学としてのキャンパスはなくとも、知識階級の圧倒的多数である聖職者が教会、修道院で活躍していた。そこに若者たちが各地から集まり、町で生活するようになった。彼らは、自主的に組合を組織して学生生活や教員の選定、カリキュラムの内容を管理するようになる。これがユニベルシタス（universitas）であり、ユニバーシティ（university）の源である。教師たちも、コレギウム（collegium）という組合を組織し、人事や謝礼金の額の問題を扱うようになった。興味深いのは、ボローニャ大学では、学生組合が主導権を握り、コレギウムの上に位置していたことである。⁹

ボローニャと並び、中世の大学の模範となったのが、パリ大学である。12世紀から13世紀にかけて徐々に教育機関として形成されてきたが、ユニヴェルシタスと正式に認められたのは1208年である。ただし、このユニヴェルシ

タスは、ボローニャと対照的に教師集団に対して用いられた。ノートルダム大聖堂附属学校（教会学校）やサント・ジュヌヴィエーヴ丘の学校、サン・ビクトール修道院の3つの建物を拠点とした地域にヨーロッパ各地から学生や学者が集まってきた。¹⁰すでに大学としての機能は備えていたが、公にはインノケンティウス三世（1198～1216 在位）によってユニベルシタスと正式に認められた。

オックスフォード大学は、もともとイングランドからパリに渡って学んだ学生たちの一部が、12世紀半ば過ぎに、帰国してオックスフォードに集まって出来た大学である。また、ケンブリッジ大学は、オックスフォードで起こったある事件（学生処刑事件 1209 年）がきっかけで多くの学生や教師がケンブリッジに移住したのが始まりと言われている。オックスフォードやケンブリッジでは、学生たちの共同生活を通して学問に励むための学寮（カレッジ college）が13世紀半ば頃設立された。重要なのは、カレッジには必ず礼拝堂があり、聖歌隊が組織されている点である。オックスフォードのクライスト・カレッジやケンブリッジのキングズ・カレッジ、セント・ジョンズカレッジの聖歌隊は日本でも有名である。

このようにヨーロッパ中世の大学は、教師と学生の組合組織が母体となって徐々に形勢されていった。キリスト教の聖職者が知識階級の代表であり、法律や神学を教えていたといわれている。音楽についても、オックスフォードやケンブリッジのように、学寮ごとに聖歌隊が組織されていることからわかるように、学生生活の重要な位置を占めていたと思われる。音楽が礼拝の中で、讃美歌や祈祷を行なう上で大きな役割を果たしている。宗教的な儀式や信仰生活の観点とは別に、音楽は、教育内容としてどのような位置づけがされていたのか、次に説明していきたい。

2.2 カリキュラムの中の音楽

カリキュラム上、一般的に教養科目は、専門科目に取り組む前に履修すべき内容を含んでいる。逆に言うと、実際にすぐに役立つ知識ではない、非実学的知識である。日本では、1991年の大学設置基準の大綱化以降、多くの大学で

一般教養科目が削られ、専門科目の比重が大きくなった。しかし、今日、改めて大学における教養の意味が見直されている。さて、この非実学的知識は、古代ギリシア・ローマの教養科目を源とするが、中世の大学教育において7自由学芸アルテス・リベラーレス (septem artes liberales) として受け継がれた。¹¹ それらは、ことばに関する3科目 (トリヴィウム Trivium) : 文法、修辞学、弁証法、数に関する4科目 : 算術、幾何学、天文学、音楽 (クワドリウィウム Quadrivium) によって構成されている。

これら自由学芸科目は、数世紀にわたり修道院や教会附属の学校で教えられてきた内容を受け継いでいる。特に、その中で高度の学問と見なされていたのが音楽である。¹² 中世の大学で必読の書と見なされていた音楽の教科書は、ボエティウス¹³の『音楽教程』である。この著書は、当時の教養人必読の書であり、9世紀以後15世紀にかけて幾度となく出版され、不完全なものを合わせても今日知りうる限りで137に上るという。

中世のボエティウスにいたるまで、西洋文化において音楽はどのようなものとして見なされてきたのか簡単に振り返ってみたい。音楽は古代ギリシア以前の原始時代には、呪術的なものとして、儀式や霊的な治療の手段として扱われていた。ピュタゴラスの『数の神秘説』によって、初めて学問として本格的に捉えられたと言われている。ピュタゴラスは、音楽が人間の心に影響を与える秘密に着目し、それを音の数的関係、すなわちハルモニアと捉えた。プラトンは、ピュタゴラスや彼の学派を批判しつつ、音楽を知的、道徳的教育の手段として捉え、理想国家の形成を目的とした論理学として捉えた。¹⁴ また、アリストテレスは、音楽が人間の非合理的な感情を発散させ、睡眠や酒のように労働や苦悩を癒す薬となること、また快楽を産む浄化作用が音楽にあると考えた。キリスト教中世になると、このような現実的な音楽の在り方は消え、宗教的な教えや預言、神の啓示に人々を導く「言葉」が音楽の原理となった。この原理には、ピュタゴラス的な数の論理が受け継がれ、「音楽は音の動きをよく整える知識である」と考えられた。秩序は、数によって説明され、完成された美しさをもっている。中世後期、実践的な音楽学が7自由学芸の一つとなり、修道院や大学の哲学部の教科とされた。

中世以降音楽の基礎理論を作ったと言われるボエティウスは、音楽を支配する秩序として、例えばオクターヴ（1対2の振動比）や2：3の完全5度の協和関係が人智を超えた「神の業」であると考え、宇宙の秩序が証しされているとみなした。¹⁵ 彼の『音楽教程』は、代表的な古代ギリシアの音楽論¹⁶をラテン語に翻訳し、著者なりにまとめたものである。中世の音楽家たちは、宇宙全体が綿密な数の比率によって調和が保たれていると考え、その調和そのものが「音楽」であると考えた。したがって、音楽は人間が創作するものではなく、それ以前からすでに宇宙に存在していると考えていた。具体的に耳に聴こえるようにするために演奏という行為によって宇宙運衝撃を与えることが必要と考えたのである。どのような衝撃が心地よい響きとなるかを考えるのが音楽家の仕事であった。¹⁷

心地よい響き、すなわち調和（ハルモニア）は、4大元素¹⁸（水、火、土、大地）の関係や四季の変化の中に存在すると考えられた。それが「宇宙の音楽（ムジカ・ムンダーナ）」である。また、人間の身体の中にも音楽がある。魂と肉体の関係、身体各部分にみられる調和などは、「人間の音楽（ムジカ・フマーナ）」である。実際に楽器の演奏で耳に届く音楽は、すべて「道具の音楽（ムジカ・インストゥルメンタリス）」であり、その中に声楽も含まれている。人間の喉、咽喉は器具、道具の一種とみなされていたと考えられる。このように、ボエティウスは、音によって聴く以前に、宇宙や人間の中に存在する調和を音楽（ムジカ musica）と考えた。その調和があれば、音が鳴り響かなくてもすでに「ムジカ」である。音楽家や演奏家は、すでにある調和を先の「衝撃を与えて」見つけ出す人なのである。決して作り出す人を意味しない。

楽器の演奏（道具の音楽）の背後に宇宙や人間の秩序が象徴されていると考えていた。その点に、音楽と天文学の結びつきがある。詳細に触れる余裕はないが、2オクターヴ（大完全音階）の中心に位置し、最初の基準の音の高さを「メセー」と呼び、それが太陽と対応する。その前後に、金星（bフラット）、水星（c）、月（d）や火星（G）、木星（F）、土星（E）が指定されている。¹⁹

2.3 音楽と生活

これまで説明してきたように、音楽が、宇宙や人間の存在の秩序・調和そのものであり、また演奏を通して存在の神秘を見出すものであるならば、音楽は宗教や人々の信仰に深く結びついたものと言えよう。旧約聖書には、イスラエルの民をエジプトから解放したモーセは、歌を歌い、鼓を打って感謝の祈りを捧げた。(出エジプト記 15 章 20～21 節) ダビデ王の後に、ソロモンが王となると、ラッパを吹き鳴らして民は大いに喜び祝った。(列王紀上 1 章 39-40 節) 新約聖書では、イエスと弟子たちの最後の晚餐時、賛美を歌ったと記されている。(マタイによる福音書 26 章 30 節)²⁰ また、パウロは神にむかって賛美歌を歌うことを積極的に奨励したといわれている。「詩と賛美と霊の歌とをもって語り合い、主にむかって心から賛美の歌を歌いなさい。」(エフェソの信徒への手紙 5 章 19 節、他コロサイの信徒への手紙 3 章 16 節) 彼の言う「詩のうた」は詩篇(古代ユダヤ教の讃美歌)、「賛美のうた」は聖句を言い替えた新作の讃美歌、「霊のうた」はメリスマ様式(一音節に多数の音符をあてる様式)の聖歌であるといわれている。²¹

つまり、聖書の中では、歌うことは祈ること、祈ることは歌うこととして捉えられている。現在でも、讃美歌の多くが最後に「アーメン」で終わることでもこのことは理解できよう。

皆川達夫によると、現存している初期キリスト教聖歌は皆無であり、唯一、エジプトのオクシリンコス [カイロの南約 200km] で発見された、ギリシア語でパピルスにしるされた賛歌であるという。²² 3～5 世紀にかけて、地中海周辺地域(シリア、アルメニア、エジプト、エチオピア、ビザンツ帝国等)で、独自のキリスト教聖歌²³が生み出された。当時楽譜は使用されず、口述が原則であったので、原型を知るすべはない。皆川がギリシアの修道院で聞いた東方教会聖歌(シリア、アルメニア、コプト、アビシニア、ビザンツ聖歌)の印象は、人里はなれた修道院で、髭だらけの修道士たちが歌っていたのは、お世辞にも音楽と言えるものではなく、「咆哮」とさえ表現できる、泥臭い、土俗的な印象をもったものだったといわれている。²⁴

本来、旧約聖書のモーセの十戒にあるように、ユダヤ教、キリスト教では、

神の像を作ってはならない、すなわち偶像崇拜が禁止されている。カトリックの聖母マリア像や東方教会のイコンなどは、神の像ではなく、信仰の媒体であり手段と捉えるべきであり、基本的に偶像崇拜禁止は遵守されていると言える。とにかく、目ではなく耳を通して神の声を聞くことがユダヤ、キリスト教では重視されたと言える。神の行なう様々な業、働きは、宇宙や人間の音楽の中にあり、道具の音楽によって私達の耳に聴こえてくると理解されていた。

3. 音楽のもつキリスト教教育の可能性

伝統的に教会で行なわれてきた教育は、信徒を育て、教会生活を行なうための準備教育（カテキズム教育含む）であった。日本のようにキリスト教の歴史が浅い国では、キリスト教教育の特徴として、特にプロテスタントでは、信仰育成のために聖書を理解することが重視され、聖書研究会が盛んに行なわれた。その結果、比較的知識階層の信者獲得に成功したと言えよう。教会のためのキリスト教教育だけではなく、さらに多くの層にキリスト教を理解してもらうために、今後、聴くことによる心の癒しや、合唱による協調性などに着目し、音楽が本来もつ調和、秩序の美しさを積極的にキリスト教教育に活用してもよいのではないだろうか。ムジカ・フマーナ（人間の音楽）において、音楽は、心と体のバランスそのものである。また、個人ばかりではなく、他者との関係を音楽は結びつける力もある。すなわち、音楽は人と人との心をつなぐことができる。さらに、神学者シュライエルマッハーが指摘するように「宗教は宇宙の直観と感情」²⁵ であり、本来的に神と人を結びつけるものである。

宗教（religion）の語源はラテン語の religio である。これは、信心深いと言う意味のほかに、結び付けると言う意味もある。²⁶ Religion が本来のもつ結合性にもっと着目し、音楽をそれに役立てる試みが日本でなされるべきと考える。共に歌うことは、心を一つの方向に向けることである。学校教育では、合唱の効用にいち早く気づき、校内や全国レベルでコンクールを盛んに行なっているのは周知の通りである。相手の声を聴き、お互い聴き合う、調和する、響きあうことに教育的意義を見出すことができる。イエスは、「聞く耳のあるものは聞くがよい」（マルコによる福音書 4 章 23 節）と言ったが、聞こえることと聴

くことは異なる。相手の声に集中し、心を相手に傾けなければ聴くことはできない。聴く能力を伸ばすことは、相手の存在を認識し、相手の話を受け入れる力（受容力）を育てることでもある。見えない神の言葉を受け入れることは、幼い頃は驚くほど素直にできることもあるが、年令を重ねるごとに難しくなる。音楽を通して聴く態度と大切さを学び、神を受け入れる心の備えとなることが、キリスト教教育における音楽の究極的な意義と言えよう。

おわりに（バッハを聴くことの意味）

最後に、J.S.バッハの音楽を聴くことの意味について一言触れたい。ドイツ文学者で現在フェリス女学院理事長の小塩 節は、ドイツの文化、芸術について極めて造詣が深い。バッハについて、ある講演会で述べていたことをここで紹介したい。²⁷

小塩は、バッハの2番目の妻アンナ・マグダレーナに捧げたクラヴィーア小曲集の裏表紙に書かれた言葉「至高の神のみをほめたたえ、人々の精神を再創造する」の中に、バッハと音楽の関係を理解する重要な鍵が示されていると考えている。端的に言うならば、バッハの音楽は、いかに技術的にうまく演奏するか（howを追いかめる）ではなく、なぜ音楽があるのか、その存在理由・目的を厳格に問う（why）ものであると言っている。²⁸ その音楽の存在理由を問う姿勢は、創造主をあがめる態度そのものであり、バッハを聴くということは、すなわち彼とともに神を賛美することと同義である、と小塩は考えている。

宗教改革者マルティン・ルターが聖書のドイツ語訳をしたアイゼナッハで生まれたバッハは、幼い頃（9, 10歳）両親を亡くし孤児となった。最初の妻マリア・バルバラを亡くし、2番目の妻の間も合わせて20人の子どもを養うために、ヴァイマールやライプツヒヒで仕事に追われ、晩年には視力を失い、65歳で亡くなった。彼の生涯²⁹は、多忙であり、多くのストレスにさらされていたと容易に想像される。この世の世俗的な営みの中で、神への祈りを音楽によって表現したバッハから、現代の多忙な社会に生きる私たちは多くの慰め、癒しを得ることができるであろう。

- * 本稿は西南学院大学公開講座 2006 年 11 月 11 日（土）キリスト教における音楽と教育～JS.バッハのカンタータをめぐる～「キリスト教教育における音楽の意義」の講演内容に基づき、論考としてまとめたものである。

<註>

- 1 『キリスト教年鑑 2004』キリスト新聞社、2003 年の統計では、全国の学校数（幼稚園から大学院まで）61,989 校中、キリスト教年鑑に記載されている学校（キリスト教学校）は 2,349 校、全体の 3.8%を占めている。大学に限ると、11.2%に及ぶ。また、キリスト教学校教育同盟の加盟校は、（小学校から大学院まで）317 校（2004 年 5 月現在）、学生・生徒・児童数は 343,581 人であり、1998 年度と比較すると約 4,000 人強の減少（約 1.2%減）である。（「キリスト教学校教育 484 号」キリスト教学校教育同盟 2004 年 11 月 15 日発行）
- 2 小林公一（1958）『キリスト教教育』 日本 YMCA 同盟出版部
日本基督教団宣教研究所第三分科会編（1956）『現代日本におけるキリスト教的人間像』 日本基督教団出版部 p.132
高崎 毅（1958）『キリスト教教育講座 2』（高崎毅・太田俊雄監修）新教出版社 pp.10-11
- 3 1949 年に全国の教会学校（1431 校）を対象としたアンケート調査をもとにまとめられた日本基督教教育協議会（編）（1950）『日本におけるキリスト教教育の現状』の序論部分には、「我が国においてはキリスト教教育が伝道的手段として採用されてきた歴史的背景がある」と言及されている。また、西洋古典学者 W.イエーガーは、「古典ギリシアのパイデΙΑは、キリスト教的手段となる」と指摘している。（W.イエーガー（1964）『初期キリスト教とパイデΙΑ』野間啓訳 筑摩書房 p.14）
- 4 赤岩 栄（1956）私はなぜ日曜学校を廃止したか 『福音と世界』 1956 年 11 月（cf.赤岩栄著作集 7 卷（1971）教文館）
- 5 M.モンテッソーリ（1993）『モンテッソーリの教育・0 歳～6 歳まで』（吉

本二郎・林信二郎訳) あすなろ書房 pp.53-54

「おとなは一つの環境を賞賛してそれを記憶にとどめているかもしれませんが、子どもはそれを無意識に吸収して、それで精神の部分形成するので。つまり、彼はこのようにして見たり、聞いたりしたものを自分自身の中で言葉として肉体化し、質の変化が行なわれるのです。この種の記憶を心理学者はムネメ (Mneme) と呼んでおり、(略)」

- 6 ボローニャ大学は、明確ではないが、1088 年創立と言われている。尚、1158 年神聖ローマ帝国フリードリヒ I 世から特許状授与が出ている。(金澤正剛 (1998) 『中世音楽の精神史』 講談社選書メチエ p.33)

- 7 1886 年に帝国大学、1897 年に東京帝国大学と改称。

「開成所は、江戸幕府が創立したオランダ・イギリス・フランス・ドイツ・ロシアなどの洋学を教授した学校。1863 年 (文久 3) 洋書調所を改称したもの。1868 (明治 1) 年新政府により開成学校として再興され、69 年大学南校、71 年南校と解消、73 年再び開成学校と称する。77 年東京大学の一部となる。」(広辞苑)

- 8 福沢諭吉は、公教育は知育のみ行なうべきと主張したと言われている。(cf. 『徳育余論』 1882)

- 9 金澤、pp. 34-35

- 10 Ibid., p.36 (ノートルダム大聖堂附属学校で 11 世紀末に教鞭をとっていた神学者ギョーム・ド・シャンポー (Guillaume de Champeaux ? ~1121) の下に若者たちが集まった。その中の 1 人ピエール・アベラル (Pierre Abelard 1079?~1142) が新たに別の学校を作り、それに対抗してギョームがサン・ヴィクトール修道院を創設 (1108 年) した。)

- 11 長倉久子 (1996) 『トマス・アクィナス 神秘と学知』 創文社 pp.10-11
「7 科目というのは、429 年以来ヴァンダル族の支配下にあったカルタゴで、460 年代から 470 年代にマルティアヌス・カッペラ (Martianus Minreus Felix Capella 5 世紀の新プラトン主義者) によって著された『フィロロギアとメルクリウスの結婚』に由来するが、ここで一般基礎教養として取り扱われている 7 科目は、既に紀元前 2 世紀にローマ人で新アカデメイア派の折

表主義者ヴァッロ (Marcus Terentius Varro B.C.116-27) が取り上げている。ヴァッロは、文法・弁証学・修辞学・幾何学 (地理学を含む)・算術・天文学・音楽・医学・建築術の9つを挙げ、マルティアヌスは、医学と建築術を除いた7つを挙げている。そして、この7つは、カッシオドルス (Flavius Magnus Aurelius Cassiodorus 485年頃-585年頃-彼はボエティウスとともにテオドリックに仕えたが、540年ごろになって世俗の活動を捨て、カラブリア地方のヴィヴァリウムに修道院を創立し、数多くの書物を集めて文化の保存に努力した-) の『神学書及び世俗書の綱要』によって中世に伝えられ、カロリング朝の人々によって3学4科と呼ばれるようになった。」
cf. Henry Chadwick (1981) *Boethius: The Consolations of Music, Logic, Theology and Philosophy*, Oxford (Clarendon Press), p.21

Châtelet François (éd) (1973), *L'histoire de la philosophie, idées, doctrines: La philosophie médiévale du Ier siècle au XVe siècle*, Paris (Hachette)

(山田晶監訳 (1976) 『シャトレ哲学史Ⅱ 中世の哲学』白水社)

Henri-Irénée Marrou (1948), *Histoire de l'éducation dans l'antiquité*, Paris (Seuil)

(横尾、飯尾、岩村訳 (1985) 『古代教育文化史』岩波書店)

12 金澤、p.41

13 ボエティウス (Anicius Manlius Torquatus Severinus Boetius ca. 480~524) ローマの哲学者、音楽理論家。東ゴート王テオドリクスの廷臣として仕え、反逆罪で投獄、処刑された。獄中で著した<哲学の慰め De consolatione philosophiae>は有名。(邦訳 ボエティウス (1985) 『哲学の慰め』(渡辺義雄訳) 筑摩書房) 音楽理論家としては、5巻の<音楽綱要 De institutione musica>によって、カッシオドルスと共に中世初期の最大の権威と仰がれた。この書物は、ギリシアの音楽理論に関する一部の誤った理解が見られるが、古典古代の音楽論の最大の規模での集大成である。また、音楽をムシカ・ムンダーナ、ムシカ・フマーナ、ムシカ・インストルメンタリスの3つに区分し、その後の音楽論に大きな影響を与えた。(下中直也編 (1988) 『音楽大事典』第5巻 平凡社 p.2348)

- 14 プラトン (2004)『国家』(上)(藤沢令夫訳) 岩波文庫 第3巻 10-12節
プラトンは、歌の三つの要素として、言葉(歌詞)、調べ(音階)、リズム
(拍子と韻律)から成立すると述べている。(p.209) 訳註によると、ギリシ
ア古典期までは、音楽は抒情詩のためのみに作曲され、抒情詩は音楽に合わ
せて歌われるために作詞されていたと言う。(p.444)
- 15 皆川達夫 (1977)『中世・ルネサンスの音楽』 講談社現代新書 p.28-
- 16 ピュタゴラス派の理論(ピタゴラスについては、プラトンの国家(下) 7
巻 12節にも触れられている。)をニコマコス(Nikomachos)の著作を通し
て要約し、プトレマイオス(Klaudios Ptolemaios ?~161)のハルモニア論
(Harmonika)をラテン語訳したものが中心となっている。(金澤 p.45)
- 17 Ibid., p.67
- 18 中世の宇宙観については、阿部謹也(1991)『ヨーロッパ中世の宇宙観』
講談社学術文庫 999 が参考になる。彼によると、中世の人間は二つの宇宙の
中で生きていたと言う。「自然界の諸力を人間がかろうじて制御しようと思
えられていた範囲内が小宇宙、ミクロコスモスであって、その外側には人間
が到底制御しえない様々な霊とか巨人、小人、死などの支配する大宇宙マク
ロコスモスがひろがっていた。」(p.194)
- 19 金澤、pp.56-57
- 20 弟子たちとユダヤ教の習慣に従い、詩篇の 113~118 篇を朗唱したという。
(皆川、p.22)
- 21 Ibid., p.23
- 22 Ibid.
- 23 修道院での音楽教育については、朝倉文市(1995)『修道院―禁欲と観想
の中世―』講談社現代新書 p.134- が参考になる。
- cf. グレゴリオ聖歌は、7世紀初頭のローマ教皇グレゴリウス I 世にちなん
だものといわれているが、資料としてはっきりしているものは 11 世紀以後
のものである。長い年月をかけ、広い地域の音楽を同化・融合したもので
、ローマ教会聖歌と呼ぶほうが正しい。聖歌は単旋律の音楽で、ハーモニー
も対旋律もなく、教会旋法と呼ばれる。ルネサンス期やモンテヴェルディ、

バッハなどバロック期の作曲家たちはグレゴリオ聖歌を素材（定旋律カントウス・フィルムスとして借用）として作品を作り上げてきた。（皆川 p.35,39,42）

24 Ibid., p.25

25 F.シュライエルマッハー（1991）『宗教論』（高橋英夫訳）筑摩書房 p.42
原題「宗教について 宗教を軽んずる教養人への講話」*ÜBER DIE RELIGION. Reden an die Gebildeten unter ihren Verächtern*, 1799

26 田中秀央（1980）『羅和辞典』研究社 p.532

27 小塩 節（2005）「響きあう言葉と音楽」日本キリスト教団出版局（阿佐ヶ谷教会での『信徒の友』創刊 40 周年記念感謝の会での講演）

28 Ibid.,p.45

29 皆川、p.231